

特集

文字だけで理解できてる!? 病態把握のための読影入門 —胸部・腹部編

特集にあたって

診療記録のなかでも、画像検査は病態を把握するためのきわめて重要な情報源です。胸部・腹部の単純X線検査やCT検査の画像には、文字情報だけでは捉えきれない身体内部の異常や変化が、時に雄弁に、時にささやくように写されています。医師にとって、身体診察や血液検査と並び、診断・治療方針の決定や治療効果の判定において羅針盤となるこれらの画像は、薬剤師にとっても、より深い病態理解と薬物療法支援の基盤になりうるものです。

日々の業務において、薬剤師のみなさまは患者さんからの聞き取りや多職種が記録した情報を手がかりに、病態を読み取り、薬物治療の効果・副作用判定といった処方の妥当性評価や服薬指導、治療提案などに活かしています。しかし、学生時代に画像検査や読影に関する教育が十分に、かつ効果的に行われてきたかは定かではありません。近年のチーム医療における薬剤師の役割の拡大を踏まえると、読影レポートを読むことに加え、実際の画像とカルテ記載内容を結びつけて理解する力は、現場での情報提供や処方支援において大きな強みとなり、薬学的介入の質をより一層高めることにつながります。

2024(令和6)年度の入学生から適用されている『薬学教育モデル・コア・カリキュラム(令和4年度改訂版)』でも、「電磁波、放射線、超音波

や可視光を利用して生体の画像を得る分析技術の原理と特徴を説明する」「正常画像と疾患画像の違いを、人体の構造や機能に基づいて説明する」ことが学修目標として掲げられています。これは、画像に対する理解が薬剤師にもより求められる時代が到来したことを明確に示しています。

本特集では、画像診断のなかでも基本となるX線・CTに焦点をあて、初学者にもわかりやすく読影の基礎を解説しています。画像を見る際の“白”や“黒”が何を意味するのか、正常画像とはどうあるべきかといった出発点から始め、胸部・腹部の代表的な疾患と画像の関連を丁寧に紐解いています。「画像が読めるようになる」ことは、カルテの文字情報が単なる記述から“身体の中のリアル”として立ち上がる体験でもあります。

患者さんによりよい医療を提供するために、薬剤師の視野を広げ、チーム医療における貢献をさらに深める第一歩として、本特集がみなさまの臨床実践に役立つことを願っています。

昭和医科大学大学院医学研究科 衛生学公衆衛生学分野 講師

諸星 北人